

第四章 室町時代中期の能樂

第一節 觀世政盛と金春宗筠

觀世又三郎政盛は永享元年に生れた。彼が父の跡を襲いで四代目の觀世大夫となつたのは、前章に於いて述べた如く、長祿の初年、彼が三十歳前後の時であつたと推定される。彼の第一線に立つての活躍は大體この頃から始まつたものと見てよい。當時の記録を見ても、長祿から寛正へかけての彼の活躍は、背後に父音阿彌の名聲を負うてゝはあるが、かなり花々しいものがある。有名な糺河原の勸進猿樂は彼が三十六歳の時であつた。もはやこの頃には、彼は押しも押されぬ大立物になつて居たやうである。父音阿彌の物故は彼の三十九歳の時であつた。

金春七郎元氏（宗筠）は永享四年に生れた。觀世政盛よりは三つ年下である。彼が父の跡を襲いで金春大夫となつたのが何時頃であつたかは明かでないが、寛正六年九月二十五日の四座立合猿樂の折には既に彼が金春大夫であつたことが略々確實に推定される。この時、彼は三十四歳、父の禪竹は六十一歳であつた。この前年あたりに彼が金春大夫となつたものではなからうかと思はれる。

應仁以後は大體この二人の天下になつたものと思はれるが、この状態は餘り長くは續かなかつた。何故ならば、この二人は揃ひも揃つて短命であつたからである。政盛は四十二歳、宗筠は四十九歳で世を去り、共に若年で大夫となつた觀世三郎之重（祐賢）と金春八郎元安（禪鳳）との對立時代が來たのである。

政盛の物故は文明二年五月二十二日の夜であつた。彼は其の日、室町殿に於いて催された猿樂に出演し、將軍義政から御服以下種々の重寶を拜領して歸宅したのであるが、その夜俄かに病を發して仆れたものである。その死が餘りに急であつたため、世間では春日大明神の御罰を蒙つたものであるなど噂したらしい。その一兩年、彼が薪能や若官祭禮に參勤を怠つたために、そんな噂が立つたものと見える。

宗筠の物故は文明十二年十一月二十七日であつた。この日はあたかも若官祭禮の式日であつて、嫡子八郎元安は父に代つて松の下の神事に従つて居た。その日、彼は岡の自宅で淋しく逝いたのである。彼の場合には、その死が若官祭禮の式日であつたにも拘らず、春日大明神の御罰であるといふやうな噂が立たなかつたばかりか、大乘院の尋尊大僧正の如きは「當道此者マデ也。以外次第。是サエ寺社之零落也」と深く其の死を惜んで居る。

この二人の一生は、その父親二人の其れに比して甚だ短かくもあり、また花やかさを缺いて居る。しかも其の晩年に應仁の亂が發生したことは誠に不幸であつた。その爲にこの二人は、相當に傑れた技倆を持ちながら、能樂史の上には餘り大きな足跡を印することが出来なかつたのであつて、その點は誠に氣の毒であつたが、二人の後繼者が、何れも悪い條件を克服して、名人の譽を得たことはせめての幸であつた。

第二節 觀世祐賢と金春禪鳳

附 觀世小次郎信光の活躍

觀世祐賢の生年は明かでない。従つて文明二年、父の政盛が急死した時、彼が何歳であつたかも知れないが、政盛が四十二歳で死んだのであるから、祐賢は未だ二十歳未滿であつたらうと想像される。それであるから、本來ならば、

觀世座は非常な危機に直面せねばならない所であつたのであるが、幸ひにも觀世座には觀世小次郎信光といふ傑物が居て、よくこの危機を救つたのである。

觀世小次郎信光は音阿彌の第七子で、永享七年に生れた。従つて政盛の死んだ文明二年には三十六歳の働き盛りであつた譯である。この人は非常に天分に恵まれた人で、仕手方として立つだけの素質は充分にあつたのであるが、それは長兄の政盛に譲つて、自分は大鼓方として身を立てた。勿論、その大鼓の技倆は素晴らしいものであつて、寶徳元年、十五歳の時、後花園天皇の内宴に召されて大鼓を打ち、御感に預かり、天皇より玉扇を賜はつたと傳へられて居る。また有名な糺河原の勸進猿樂の折には、洲濱の筒と稱する名器を携へて登場し、満場の觀衆をして絶讃せしめたと云はれて居る。

この當時、觀世座は、ワキの名手菊三郎^{トウキョウ}を失つて、しかも其の後任者を得る能はず、非常に難澁した模様である。糺河原の勸進猿樂の折なども他座の脇師を雇うて窮境を免れたやうな仕儀であつた。従つて信光はワキとして舞臺に立つたことも屢々あつたらしく、後世の書物には彼を觀世座の脇師として傳へるものがある。觀世座の脇方拂底は相當長い間つゞいた模様で、結局、將軍家の上意に依つて金春座から守菊彌七郎と日吉源四郎の兩人が、金剛座から坂戸四郎元正が觀世座に加入して漸く解消したのであるが、それは文明十四五年頃のことであるから、それまでは信光が屢々ワキとして舞臺を踏んだものと推測される。

斯様に萬能に達した人であつたので、遂に衆望を擔つて觀世座の權守^{ゴんかう}となつた。權守といふのは大夫に次いで的重要職で、樂屋に在つて萬事を主裁し、萬一、大夫が病氣でもあれば、代つて能をも勤め、また其の他の何役でもあれ、俄かに事の缺けた場合には、直ちに其の代役をなす義務があるので、諸藝通達の人でなくては到底動まらない役

であるが、信光はこれを完全に勤めおほせたのである。彼が屢々ワキとして舞臺に立つたのも恐らく權守としての義務を遂行するためであつたのであらう。

かういふ諸藝通達の士を叔父に持つたことは祐賢に取つては誠に幸福なことであつた。祐賢が大夫となつてから當分の間は、信光がシテとして舞臺に立つたことも屢々あつたらしく、當時の記録の中にもさういふ記事が二三發見される。然し、文明十年頃からは、大體祐賢が一本立ちになつて、觀世座を統率して行つたやうである。

文明十年四月、洛中誓願寺の附近に於いて盛大な猿樂が興行された。これは祐賢を主演者とするもので、勸進能は二十二日・二十三日・二十五日の三日間に互つて催され、將軍義尙も臨場した。これは、從來の慣例から見、將軍家の内命を受けて興行したものと推定される。恐らく祐賢が一人前になつたので、それを天下に披露し、併せて其の前途を祝福してやらうといふのが將軍義尙の意圖であつたらうと思はれる。

祐賢は此の後も小規模な勸進能を數回興行して居る。また將軍家を始めとして貴顯の邸宅に於いて演能したことも數多く記録に残つて居るが、此處に其等を枚舉する暇はない。

祐賢の物故は明應九年と推定されるが、その享年は明かでない。然しこの人も決して長命ではなかつた。恐らく五十以前に死んだものと思はれるが後世の書物は何れも彼を名人として傳へて居る。天分も豊かであつたのではあらうが、信光の教導が與つて力あつたであらうことは想像に難くない。

祐賢が死んだ時、嫡子元廣(道見)が何歳であつたかは明かでないが、先づ二十歳前後であつたらう。然し、信光は未だ健在であつたから、觀世座は再び危機に襲はれることを免れたわけである。

觀世祐賢が、若年にして父を失ひながら、叔父信光の補佐と將軍家の後援に依つて比較的平坦な道を歩み得たのに

對して、金春禪風の生涯は非常に多難であつた。

禪風の父宗筠が死んだのは禪風が二十七歳の時であつた。二十七歳まで父の膝下に在つて其の薰陶を受け得たことは祐賢に比べて餘程幸福であつたわけであるが、彼には信光のやうな良い後見人がなかつた。これは非常に不幸なことであつた。彼には日吉與四郎といふ叔父があつた。與四郎は宗筠の妹婿で金春座の脇師として活躍した人である。非常に技藝の傑れた人であつたさうであるから、若しこの人が健在であつたならば、禪風も大して困ることはなかつたらうと思はれるのであるが、不幸にもこの人は父宗筠の亡くなる前年、即ち文明十一年の十月十五日に死んでしまつた。従つて禪風は父宗筠の死と共に全く天涯孤獨の身となつたわけである。

文明十三年十二月一日、禪風は春日神社の社頭で法樂能を行つた。禪風の胸中は推察するに難くない。恐らく自分の將來を祈らんが爲に、父の一週忌のすむのを待つて社前に額づいたものであらう。禪風は神の御前で能を舞ひつゝ、固い決意をしたものと思はれる。

然し、天は飽くまでも若き禪風に對して苛酷であつた。即ち、金春座は二人の優秀なる樂師を失はねばならぬ仕儀になつたのである。その一人は守菊彌七郎、今一人は日吉源四郎で、この二人は前將軍義政の命に依つて觀世座に加入せしめられたのである。守菊彌七郎は宇治猿樂の守菊大夫の兄であるが、文明の初年から金春座に屬し、専ら脇師として活躍して居た。日吉源四郎は前に述べた日吉與四郎の子であつて、禪風の爲には從弟に當る人である。これも同じく脇方として活躍して居たものと推測される。この二人は觀世座の脇方拂底を救ふ爲に引き抜かれたもので、日吉源四郎の觀世座加入は文明十五年二月、守菊彌七郎は其れより一足早く觀世座へ加入せしめられたものゝやうである。かくて、さなきだに無人の金春座は愈々ひどい無人になつたわけである。然し、禪風は少しも撓まず、無人の一

座を率ゐて奮闘し、春日の神事能には缺かさず參勤して居る。殊に文明十六年の二月十日、大乘院で金春・金剛兩座の立合能が催された折などは、脇能以下六番を引き受けて、これを首尾よく勤めおほせて居るが、その辛勞はさぞかしと思ひやられる。

斯様な逆境に立ちながら、禪風が些かも屈せずに奮闘を續けて行くことが出来たのは、勿論彼自身の強固なる意志に據るものではあるが、一つには禪風の背後にあつて後援に努めた官符衆徒の棟梁古市澄胤の鞭撻が與つて力あつたものと察せられる。

澄胤は禪風より三歳（一説には二歳）年長であつて、文明七年、兄胤榮の後を承けて古市家の當主となり、官符衆徒の棟梁として四隣に勢力を振ふに至つた。この澄胤が大の禪風最良で、禪風の爲には如何なる努力をも吝まなかつた。その澄胤の後援が最も露骨に顯れたのは、文明十六年十二月三日、一乗院で行はれた觀世と金春の立合能の折であつた。

この日の能に就いては『大乘院寺社雜事記』に詳細な記述があるが、それに依ると、この日の能は始め觀世一座で行ふことに決定して居たのであるが、これを聞いた古市澄胤が承知しない。是が非でも金春座を參勤せしめよと主張したために、兩座の立合といふことに決着したものゝやうである。所が、能の當日が大變な騒ぎであつた。この事は『經覺私要鈔』に詳しいが、それに依れば、觀世と金春とが互に脇能を自分の座に演らせよと言つて聞かず、その爲に能の開始が酷く遅延した。結局一乗院の門主が古市澄胤を宥めて、今後斯様な場合には必ず金春に脇能を演らせるといふ旨の御教書を金春座に與へて、その日の脇能は觀世に演らせることになつたのである。この争論は如何に最良目に見ても金春方の言ひ分が無理である。金春方に言はせれば、金春座は秦河勝以來の正しい傳統を有し、殊に大和

四座の本座であるから、他所は別として南都に於ける催能には當然脇能を勤める権利があると言ふのであらうが、この能は前にも述べた如く當初は觀世一座で勤める筈であつたのである。其處へ無理に割り込んで置きながら、脇能を此方に演らせるといふのだから、少し蟲が良すぎる。然し、金春方にして見れば、大事な役者を二人まで觀世へ引き抜かれた直後ではあり、この位の駄々はこねて見なくては腹が癒えなかつたのであらう。禪風も若かつたし、また古市澄胤も若かつたのであるから、考へて見れば同情の餘地がないでもない。然し、かういふ無理を言つた結果は餘り禪風の爲にならなかつた、といふのは、この事件があつてから、興福寺の衆徒の中に禪風に對して反感を懐く者が少からず出來たらしいからである。この爲に禪風は後年に至つて酷い目に遭ふことになつたのである。

それは此の事件があつてから丁度五年目、即ち延徳元年の十二月四日のことであつた。その前日、即ち十二月三日、中院に於いて勸學院鎮守社の遷宮の猿樂があり、これには觀世大夫（祐賢）が勤仕した。その翌日、同所に於いて禪風が演能する豫定になつて居た。これも恐らくは古市澄胤の發案したことであつて、觀世に對する對抗意識から計畫されたものであることは言ふまでもない。これが豫てから禪風に對して不快の念を懐いて居た中院方の衆徒の感情を刺戟した。その結果、大變な騒動が持ち上つたのである。

その日の朝、禪風が一座の者を率ゐて中院へ入らうとすると、院内には既に二十人ばかりの六方衆が頑張つて居て、一同の者の樂屋入りを阻止し、暴力を以つて一行を追ひ拂つた上、舞臺まで叩き壊してしまつたのである。暴行者は早速處罰されたが、その結果、金春方を支持する大乘院方の衆徒と中院方の衆徒の對立となつて、騒ぎは非常に大きくなつた。中院方の衆徒の言ひ分は、觀世に能を演らせたのは遷宮のための神事である、それに金春が對抗して出しやばつて來る必要はない、といふので、これは確かに一理ある。中院方は金春を奈良から追放してしまへと思ま

くし、大乘院方は金春の爲に逗留費用を調達して與へ、あくまで抗戦するの決意を示し、一時は大變な騒動であつたやうである。この紛擾も結局は古市澄胤の威壓に依つて静まり、十二月十二日、中院に於いて金春座の演能が行はれることになつた。そのために舞臺が新設され、當日の警備には古市澄胤が手兵を率ゐて當ることになつた。かくて當日の演能は無事に終了したのであるが、こゝに特記すべきことは、一時觀世座に加入して居た守菊彌七郎が再び金春座に復歸し、この日の演能に禪風のワキを勤めて居ることである。これは金春座の實力が次第に充實して來た證據と見てよからうと思ふ。

なほ將軍義尙は既に此の年の三月に薨じ、また前將軍義政は翌年の正月に薨じた。代つて將軍となつた者は義政の甥（義視の子）義植であつた。然し、義植の天下は長くは續かなかつた。即ち、明應二年四月、細川政元が同じく義政の甥である義澄（政知の子）を擁立して義植を幽閉した。義植は密かに忍び出で、越中に逃れ、かくして天下は義澄の手に歸したのである。

かくして京都の狀勢はガラリと變つた。これと共に能樂界の狀勢も變つて來た。今までは觀世座が將軍家の後援に依つて壓倒的な勢力を振つて居たが、觀世最良の義尙と義政とが相次いで薨じた結果、こゝに各座の自由競争時代が來たのである。當時の記録を見ても、延徳以前は室町將軍家の能と云へば殆ど觀世座が獨占して居るが、明應以後になると、寶生・金春・金剛の三座の進出が目立つて多くなつて來る。禪風もこの風潮に乗つて京都へ進出し始めたのである。

明應二年六月二十一日、將軍家に於いて觀世・金春兩座の立合能が行はれた。この時の將軍は義澄である。能は能世が九番、金春が四番で、兩座の大夫は各々五千五百疋を給與せられた。これが禪風に取つては將軍家に於ける最初

の演能であつたやうである。

明應六年三月二日、將軍家に於いて金春と金剛との立合能があつた。これは能數二十五番といふ大規模の催しで、兩座の大夫は各々百貫、并に御小袖を拜領して退下した。なほ禪鳳は上京のついでに法性寺に於いて勸進能を興行して居るが、こゝに特記すべきことは、この勸進能に就いて管領細川政元が色々と骨を折つたらしいことである。この一事を見ても、禪鳳の聲價が都人士の間に次第に昂まりつゝあつたことが想察される。

然し、明應七・八・九の三年間は禪鳳の京都進出の機會がなかつた。それは専ら京都方面の物情に依るものであると思はれる。即ち、明應七年八月には京都に大地震があり、十月には前將軍義植が越前の朝倉氏の助力を得て反撃の氣勢を見せ、翌八年七月には細川政元が延暦寺を攻めて其の諸堂を焼き、また十一月には義植の軍勢が江州まで攻め込んで來たりした。更に翌九年七月には京都に大火があり、九月二十八日には後土御門天皇が崩御あらせられた。かういふ次第であつたから、禪鳳の京都進出の機會のなかつたのも當然と言はねばならない。

然し、翌文龜元年に入るや禪鳳の京都に於ける活躍は花々しく開始せられた。先づ四月の五日から四日間、今熊野に於いて勸進能を催したが、近衛政家を始め多くの公卿達が見物に出かけ、非常な盛況であつたやうである。禪鳳の名は愈々都人士の間に高くなつたものと思はれる。この年の六月、將軍義澄が細川政元の居城である真木島城に赴いた折にも、禪鳳は特に召し出されて演能して居る。禪鳳に對する政元の寵顧の厚かつたことが察せられる。思ふに禪鳳の京都進出に對しては政元が相當に力を添へて居たものであらう。

文龜三年五月十日、禪鳳は又々室町殿へ召されて演能して居る。この日の能は細川政元の主催で、觀世と金春との立合であつた。この時の觀世大夫は祐賢ではなく、その子の元廣（道見）である。なほ禪鳳は同年六月十日にも室町

殿に召されて演能して居る。この時は觀世・金春・寶生の三座立合であつた。

これらの事實から推して考へるに、この頃の觀世と金春の關係は以前のやうな險惡なものではなく、むしろ親密であつたらしい。尤も以前とは狀勢がスツカリ變つて居る。禪鳳も既に五十歳であり、その昔の競争者であつた觀世祐賢は既に亡く、しかも禪鳳の境遇は以前と違つて甚だ順調である。従つて昔日の尖鋭化した感情も自づから解消して居たに相違ない。しかも同座して演能する機會が多くなつたので、と禪鳳元廣との間柄は急に親密の度を加へて行つたものゝやうで、その結果、禪鳳の女が元廣に嫁することとなり、こゝに兩家の完全な和解が成立したものと思はれる。

永正二年二月、禪鳳は南都の薪能を勤めるや、直ちに上京し、十三日から四日間、洛東眞葛ヶ原に於いて盛大な勸進能を催した。禪鳳がこの能を興行するに就いては青蓮院の門跡尊應准后が色々と援助した。能の様子は尊應准后の『粟田口尊應准后猿樂記』に詳しく見えて居る。

禪鳳は、この能が終つた後も尙ほ京都に滞留し、三月中旬には四條クシゲ邊に於いて、また四月中旬には祇園邊に於いて勸進能を興行して居る。なほ同年六月下旬には南都西手搔に於いて勸進能を催して居る。この年、禪鳳は五十二歳であるが、恐らくこの前後が一生の中で最も輝かしい時代であつたらうと思はれる。

永正三年二月二十七日、室町殿に於いて觀世・金春の立合能があつた。これも細川政元の主催であつたが、この後、禪鳳の京都方面に於ける演能の記録が一時バツタリと途絶えてしまふ。それもその筈で、永正四年六月、細川政元が家宰香西元良の爲に弑せられ、翌五年六月には前將軍義植が入京し、再び將軍に任ぜられ、細川高國が管領となつたが、未だ天下靜謐に至らず、永正八年八月、前將軍義澄が薨するまでは、京都は物情騒然たるものがあつた。こ

のために京都の能樂界は一時は閉息状態にあつたのである。

尤も、義種が將軍に任せられてからは折々能も催されたらしく、禪鳳も永正六年十二月二十二日、室町殿に召されて演能して居る。永正八年の冬からは能の催しも多くなり、禪鳳は十月二十九日、十一月十四日、同十七日と相次いで室町殿へ召されて演能して居る。この内、後の二回は觀世と金春の立合能であつた。

永正九年四月、將軍義種が畠山邸へ赴いた折、禪鳳は召されて演能して居るが、これを最後に禪鳳の京都方面の演能記録が絶える。禪鳳は永正十年に丁度六十歳であるが、この當時の慣例から見ると、この年頃が隠居の適齡であるから、この前後に第一線を退いたものと想像される。

禪鳳の歿年は明かでないが、『禪鳳能謳音曲雜談聞書』の記事に依つて永正十四五年頃までは健在であつたことが知られる。

禪鳳は技藝に秀でて居たばかりでなく、文筆の才もあつて、『毛端私珍抄』・『禪鳳習道目錄』などの遺著がある。また其の藝談を筆録したものに『禪鳳能謳音曲雜談聞書』がある。これらに依つて彼の藝道に関する識見を窺ふことが出来る。また論曲も數番書いて居る。「嵐山」・「生田敦盛」・「初雪」・「一角仙人」・「東方朔」などは其の代表作と言へよう。これらは特に傑れた作品とは言へないが、いづれも特徴のある作で、捨て難い所がある。

禪鳳の跡は嫡子七郎喜昭（宗瑞）が相續した。この喜昭を禪鳳の嫡孫であると傳へる書物もあるが、それは誤りである。

第五章 室町時代末期の能樂

第一節 觀世道見と金春宗瑞

前章に述べた如く觀世道見の妻は金春禪鳳の女であるから、道見と宗瑞とは義理の兄弟になる。年齢も略々相同じかつたであらうと想像される。然し、道見は早くから父に死別し、若年にして六代目（實は七代目）の觀世大夫となつたのに對し、宗瑞の父禪鳳は長命であつたので、宗瑞が金春大夫となつたのは十數年遅れて居る。その上、道見が短命であつたから、兩人が觀世・金春兩座の代表人物として相對立した時期は餘り長くはなかつた。

觀世道見は幼名を鬼若と言つた。『十輪院内府記』の文明十六年正月二日の條に、觀世の子供鬼若・長若の二人が尺餘の積雪を冒して參賀に來た由が見えるが、この鬼若が後の道見である。長若といふのは弟であらう。道見の生年は判らないが、文明十六年の此の記事が彼に關する最初の記事であることから見て、先づ此の時に七八歳であつたらうと思はれる。然りとすれば、明應九年に父祐賢の死んだ時には二十三四歳であつた筈である。しかも觀世座には觀世小次郎信光といふ傑物が居り、權守の要職に在つて萬事を主裁して居たから、道見はさまで世間的な苦勞を嘗めず、に濟んだらうと思はれる。その上、金春禪鳳の女を妻に迎へたから、謂はゞ鬼に鐵棒で何處からも指一本さされる憂へもなかつた。

道見が觀世大夫となつた頃は、將軍は十一代義澄の代で、細川政元が管領として勢威を振つて居た。彼が觀世大夫

として始めて將軍家の演能に従つたのは明應九年五月二十五日であるが、その以前にも單獨で將軍家に於いて演能した事があつた。即ち、明應八年七月二十三日、彼は室町殿に召されて演能して居る。これは細川政元が延暦寺を攻めて其の諸堂を焼いた戦勝祝賀能であつた。この能に何故未だ部屋住の道見が召されたものかは明かでないが、或は父祐賢が既に健康を害して病床に在つたためかとも想像される。

この後は、或は單獨で、或は岳父金春禪鳳と共に、また禪鳳が隠退した後は宗瑞と共に、屢々室町殿に召されて演能して居る。

道見を輔けて觀世座を泰山の安きに置いた功勞者、觀世小次郎信光は永正十三年七月七日に八十二歳の高齡で永逝した。彼は諸藝に通達し、觀世座の權守として祐賢・道見の二代に互つて大夫の後見をなし、觀世座をして貧乏搖ぎもさせなかつた傑物である。その上、彼は豊富な文學的才能を有し、三十餘番の謡曲を書き遺して居る。その作品の特徴は演劇的要素の豊かなことで、この點に於いて彼は世阿彌や禪竹と鮮やかな對照をなして居る。これは、前章に於いて述べた如く、彼がワキとして舞臺を踏んだことが多かつたので、ワキがシテと對抗して活躍する曲を好んで作書したためであらうと思はれる。「船辨慶」・「安宅」・「紅葉狩」・「大蛇」・「皇帝」・「愛宕室也」などは其の意味での代表作である。中には「張良」や「羅生門」のやうなワキがシテを凌駕して活躍する變態的な作品さへある。これらの作品は何れも豪華絢爛な趣を具へ、見た目の花やかなことが其の特徴であるが、彼の作品の中には舞歌幽玄を旨とした「胡蝶」・「遊行柳」の如き作品もある。この二曲は世阿彌や禪竹の傑作と比較しても毫も遜色のない立派なもので、謡曲作者としての信光が愈々凡庸の人でなかつたことを痛感させられる。世阿彌・禪竹に次いでの大作者であると言つて宜からう。

信光の死んだ時には、道見は既に四十前後であつた筈であるから、信光の死に依つて觀世座が動搖するやうな心配は全くなかつた。この頃の道見は金春宗瑞と共に既に斯界の第一人者であつて、その活躍も中々目ざましいものがあつた。即ち、永正十六年二月下旬には四條烏丸邊に於いて、また同年三月中旬には祇園林邊に於いて、また大永二年三月初旬には近衛坂に於いて勸進能を興行して居る。藝も恐らく脂の乗り切つた所であつたらうと思はれるが、天は齡を藉さず、大永二年、突如として逝いた。享年は明かでないが、四十五六歳であつたらうと思はれる。嗣子元忠（宗節）は未だ十四歳の若年であつた。

金春宗瑞が父禪鳳の跡を承けて金春大夫となつたのは大體永正十年頃と推定される。この時、宗瑞が何歳だつたかは明かでないが、永正十年には父禪鳳が六十歳、嫡子八郎喜勝（岷蓮）が十歳であるから、宗瑞は恐らく三十五六歳であつたらうと思はれる。この人は長命で、天文二十一年三月、なほ健在であつたことが記録の上に明記されて居るが、前の推定に誤りがなければ、既に七十四五歳の高齡であつたわけである。その歿年は明かでないが、先づ天文の末と思へば間違なからう。

この人は後世の書物には非常な名人として傳へられて居る。勿論、さうであつたに相違ないと思はれるが、當時の記録に依つて其の社會的な活躍を調べて見ると、割合に花やかでない。勸進能の如きも記録に残るものは僅かに一回しかない。即ち、大永二年四月下旬、東洞院で興行した勸進能の様子が記されて居るのみである。また武家方面の演能とても同様で、永正十五年三月十七日及び二十日の兩日、畠山邸で觀世と立合で演能したこと、大永六年十月十九日、室町殿で同じく觀世と立合で演能したことなどが記録に残つて居るのみである。また南都に於ける演能も恒例の薪能や若官御能を除いては、殆ど目ほしいものがない。尤もこれは興福寺の經濟的な窮迫の反映でもあるのであるが

とにかく寥々たるものである。たゞ些か光彩のあるのは、石山本願寺に於ける演能であつて、これは彼が證如上人の寵遇を得て居たためである。

これらの事實から推して考へるに、宗瑞は曾祖父禪竹と同じく消極的な人物であつて、無闇に出しやばるやうなことは嫌ひだつたのだらうと思はれる。然し、技藝にかけては當代無比の名手であり、殊に其の晩年は斯界の大御所として凡ゆる人々から崇敬せられた。世間では彼を呼んで大太夫と云つたが、これは斯界第一の高齢者で同時に雙びなき名手であつた宗瑞に對して人々が捧げた尊稱である。かういふ尊稱を捧げられたことから推しても、彼が温厚篤實な人格者であつたことが想像される。

第二節 觀世宗節・實生重勝・金春炭蓮と金剛氏正

附、觀世彌次郎長俊の功勞

大永二年、觀世道見が死んだ時、嗣子元忠（宗節）は僅かに十四歳であつた。彼は道見の第三子である。道見には四人の男子があつた。長男は何うも技藝の素質が餘り良くなかつたらしく、これは越智觀世（十郎元雅の家系）の名跡を継ぎ、觀世十郎大夫と稱した。この人は三河へ下つて徳川家康に仕へ、其の寵遇を受けた。後年に至つて觀世座が徳川家から特別の待遇を受けるやうになつたのも其の基礎は此處にあつたのである。次男の宗顯は技藝の素質は良かつたが、左眼がつぶれて居た爲に、大夫として舞臺に立つことが出来なかつた。そこで三男の元忠が父の跡を襲いで七代目（實は八代目）の觀世大夫となつたのである。四男の重勝は實生將監の養子となつて、實生大夫となつた。元忠（宗節）が觀世大夫となつた時は十四歳の少年であつたが、幸ひ觀世座には觀世彌次郎長俊といふ名脇師が居

て、これが若年の大夫の輔佐教導に當つた。

この觀世彌次郎長俊は小次郎信光の嫡子である。信光には三人の男子があつた。長男が彌次郎長俊で、この人は坂戸四郎元正の弟子になつて脇方として立つた。これは恐らく信光の計らひで、觀世座をして再び脇方拂底の窮苦を嘗めさせまいとする深謀遠慮に出たものと解される。この人は父の信光に似て非常に技藝の傑れた人で、觀世家に傳はる一切の能及び其の習事に通じて居たと言はれる。その上文筆の才もあつて、「正尊」を始めとして「大社」・「江島」・「輪藏」・「葛城天狗」・「岡崎」など數番の謡曲を書き遺して居る。次男は又次郎信重と云つて、これも兄と同じく脇方として立つた。この人の子が有名な彦右衛門豐次で、小鼓觀世家の祖となつた。三男は彌三郎元供と云つて、この人が父信光の表藝である大鼓の藝統を繼承した。

さて若年の大夫の輔導役を承つた長俊は實によく努力した。宗節が一人前になるまでは其の名代として屢々演能し、一座の結束を固めて居たばかりでなく、自分が習ひ憶えて居た所の觀世家傳來の能の故實を一毫も餘さず宗節に傳授し、宗節を不世出の名人に仕立て上げたのである。全く信光と云ひ長俊と云ひ觀世宗家に取つては忘れることの出来ない大功勞者である。

享祿二年五月上旬、五條玉造に於いて觀世座の勸進能が興行された。この時、宗節は二十一歳であつた。恐らくこの勸進能は宗節が一人前になつたことを天下に公表するための催しであつたのだらうと想像される。この能の役々はワキが觀世彌次郎長俊、大鼓が大倉九郎能氏、小鼓が官増彌左衛門親賢、笛が檜垣本彦四郎であつた。いづれも名人の譽を取つた人ばかりであるから、その舞臺はさぞかし充實したものであつたらう。

宗節は、この後も屢々勸進能を興行して居る。第二回は天文九年三月下旬に京都西陣で催された。この時、宗節は

三十二歳である。なほ觀世彌次郎長俊は、この翌年、五十四歳で歿した。

第三回は天文十四年三月上旬、相國寺石橋八幡で興行された。初日の七日には將軍義晴が微行して見物に來た。第四回は天文二十一年三月二十七日、伊勢邸の犬馬場で催された。これは餘り大規模の興行ではなかつたやうである。

第五回は永祿七年五月中旬、再び相國寺の鎮守石橋八幡の社地で興行された。これは非常に盛大なものであつたらしく、將軍義輝も見物に來た。この時、宗節は五十六歳、養嗣子元尙(宗金)が二十九歳であつた。この元尙といふ人は宗節の弟である寶生重勝の子であるが、宗節は一生獨身で通したので後繼者がなかつたため、この元尙を養子に迎へたのである。

宗節の武家方面に於ける演能は極めて數が多く、それを枚擧する餘裕はないが、永祿の末になると、足利將軍家の社稷は愈々衰頹の一路を辿り、觀世座にも次第に生活の不安が押し寄せて來た。そこで宗節は遂に意を決して、元龜の初年、養嗣子元尙を伴つて遠州濱松に下り、徳川家康の許に身を寄せた。濱松には長兄の十郎大夫が居たので、それを頼つて下つたものと思はれる。家康も中々能に興味を持つて居たし、嫡男の岡崎三郎信康は大變な能ファンであつたから、宗節父子が身を寄せるには誠に好都合であつた。宗節も元尙も家康の庇護の下に一生を終つたのである。さて宗節の弟で寶生大夫となつた重勝も兄に劣らぬ名人であつたと傳へられて居る。一體、寶生家には餘り名人が出なかつたらしく、この重勝の代に至つて初めて第一線に進出したかの觀がある。この重勝を俗に古寶生といふが、これは其の以前に大した大夫がなかつたためであらう。『四座役者目録』の如きも、古寶生の前に俗に鼻高寶生と云はれた上手があつたことを傳へて居るのみである。

重勝といふ人は大層研究心の強い人で、亂拍子を稽古するにも、先づ小鼓から習ひ始めるといふ風であつたから、その技藝は非常に堅實であつた。伯父の金春宗瑞の藝に私淑して其の風體を學び、常に「自分の花傳書は伯父の金春宗瑞だ」と人に語つて居たと云ふ。重勝も宗節と同じく東國に下つて小田原の北條家に身を寄せ、元龜三年、小田原で歿したと傳へられて居る。一子元尙は兄宗節の跡を繼いで觀世大夫となつた。

金春炭蓮は宗瑞の子である。炭蓮は父の宗瑞とは反對に非常に積極的な性格の人であつたが、藝は餘り上手ではなかつたらしい。然し、武術には達して居たらしく、こんな話が傳へられて居る。或る時、炭蓮が餘所へ行つて酷く酒に酔つて歸る途中、伴れて居た従者が「大層お酔ひになりましたナ」と言つたのを立腹し、「怪しからん奴だ」とばかりに腰の刀を抜いて切りつけた。所が、この従者が相當に心得のある者で、自分も抜き合せて主人に切つてかゝつた。炭蓮はよもや對手が自分に切つてかゝらうとは思はなかつたのであらう、不意を打たれて怯む所を、首へ一太刀浴せられて後へ仆れた。従者はそれを見すまして悠々と立ち去らうとした。その時、炭蓮は左手で首の手疵を抑へて後から走りかゝり、一刀の下に従者を切り伏せて歸宅したと云ふ。然し、首の手疵は中々の重傷で、一時は生命を廻づかはれたが、本願寺の家老で炭蓮の弟子であつた下間少進法印の手當に依つて生命は取り止めた。然し一生首が廻らなかつたと云ふ。下間少進法印は、この功に依つて、一子相傳の「關寺小町」の傳授を受けたと傳へられて居る。この話に依つても想像出来るやうに炭蓮といふ人はかなり剛愎な人物で、従つて敵も相當に多かつたらうと思はれる。

彼が金春大夫となつたのは何時頃であつたかは判明しないが、天文八九年の頃と推定される。天文九年三月十六日、石山本願寺に於いて炭蓮が演能した際には既に金春大夫になつて居たことの確證がある。彼は永正元年生れであ

るから、三十六歳か三十七歳で大夫となつたわけである。然し、父宗瑞はなほ十數年後まで健在であつたので、炭蓮は父の隠然たる勢力を背後に負うて相當に勢力を振つた様子である。尤も、それは一つには觀世・寶生兩座の大夫が彼に好意を持つて居たからでもある。

前にも述べた如く、觀世道見の妻は金春禪風の女であるから、觀世道見と金春宗瑞とは義理の兄弟であり、觀世宗節・寶生重勝の二人は金春炭蓮と從兄弟同志である。即ち、この時代には觀世・寶生・金春の三家は宛ら一家の如き状態にあつたのである。

所が、この三家を向うへ廻して、堂々と争つた快男兒がある。それが金剛氏正である。金剛家も、寶生家と同じく、これまでには餘り大した名人が出なかつたらしい。氏正は謂はゞ中興の祖である。「四座役者目録」の金剛大夫代々之次第の項を見ても、氏正に筆を起して居る。

氏正は永正四年生れで、炭蓮よりは三つ年下、宗節よりは三つ年上であつた。大兵肥満で、しかも毛深く、手などは宛ら熊の掌を見るやうだつたと云ふ。瘡氣で鼻が腫れて居た上に、鼻聲であつたので、世人は氏正を呼んで鼻金剛と云つた。それで居て、藝は中々確かりして居たらしい。然し、非常に剛愎な人で、種々の逸話を残して居る。例へば『隣忠見聞集』の中に次の様な話がある。或る時、氏正が奈良の或る寺で不動尊の木像を見た。その形相が實に素晴らしいので、あゝいふ面を着けて「調伏會我」を舞つて見たいと思ひ込んだ。そこで夜陰に乗じて彼の寺に忍び入り、件の尊像を鑿で打ち割つて家へ持ち歸り、それを面に打つて「調伏會我」に用ゐた所、それから鼻に腫物が出來、遂に鼻の先が腐れ落ちてしまつた。氏正が鼻金剛と異名されたのは、このためである、と云ふのであるが、どうも少し話が出来すぎて居て、そのまゝは信用出来ないが、ともかく氏正といふ人の面目は躍如として居る。いかさま

氏正といふ人は其の位なことはやりかねない人である。また「四座役者目録」には、こんな話が出て居る。氏正が堺で勸進能を興行して「道成寺」を舞つたことがあつた。その申合せの日、小鼓を打つ油屋常琢といふ男が氏正に向つて「明日の亂拍子は何うなされますか。實は自分は官増彌左衛門にも習ひ、また金春宗瑞にも習つて、兩様の打ち方を心得て居りますから、お好みに依つて、どちらでも打ちませう」と言つた。氏正は烈火の如く怒つて「生意氣な事を言ふ。何うでも貴様の打ちたいやうに打て。俺は俺で勝手にやる」と怒鳴りつけた。勿論、翌日の亂拍子は滅茶苦茶だつたといふ。萬事が此の調子だつたから、敵も少なくなつたらしい。マア金春炭蓮と好一對の人間であつた。かういふ倨傲な二人の人間が時を同じうして生れ、所を同じうして生活して居たのであるから、無事にすむ筈がない。これで喧嘩が起らなければ、むしろ不思議である。

兩人の第一回の衝突は天文十年の十一月に起つた。即ち、若宮祭の松下の立合に炭蓮と氏正とが床几の立所を争つて大喧嘩をしたのである。これは言ふまでもなく氏正の言ひ分が無理であつて、家格から言つても傳統から言つても金剛が金春の上座に坐る謂はれない。その位の事は氏正といへども百も承知はして居たのだらうが、恐らく炭蓮みたいな下手糞な奴の下座には絶対に坐れないといふのが氏正の腹であつたらう。この争論が何う結着したかは記録の上には明記されて居ないが、翌日の後日猿樂に氏正が脇能を勤めて居る所を見ると、何うやら氏正の我意が徹つて、炭蓮が折れたものらしい。恐らく濃厚な宗瑞が炭蓮を宥めて讓歩させたのであらう。この時、炭蓮は三十八歳、氏正は三十五歳、何れも名うての暴れ者のことゝて其の騒ぎはさぞ大變だつたらう。

この事件は炭蓮が金春大夫になつたばかりの時のことであるが、流石の氏正でも名人宗瑞が金春大夫であつた間は無茶なこと言ひ出せなかつたものと見える。そして宗瑞が第一線を退くや否や、忽ち本性を發揮して、我意を通し

たものと思はれる。

この問題は天文十三年に至つて再燃し、又もや大騒動になつた。今度は炭蓮も頑として一步も退かない。結局、春日の神前で神闘を取つて解決する事になつた。所が、神闘の結果は金春の負けであつた。然し、炭蓮は、それではと云つて金剛の下座に坐るやうな男ではない。一座を率ゐて山城へ引き上げてしまつた。かうなると、觀世も寶生も黙つて居ない。金春が歸つて來ない限り、自分等も神事に従ふわけには行かない、と強硬に主張して譲らない。結局、この年の神事は金剛一座で勤めたのであつた。無論、後日猿樂も金剛一座で演つた。能は六番あつて、「難波」・「定家」・「吳服」の三番を氏正が、「敦盛」・「殺生石」・「槿」の三番を嫡子孫太郎久次が勤めた。この時久次は十一歳であつた。

この金春・金剛兩座の諍論は全く前代未聞の騒動でかういふ事件の起つたのも、畢竟は興福寺の勢力が衰頽したためである。この諍論の様子は「四座役者目録」に委しく記されて居る。天文十年・十三年の兩度の紛争を一度のやうに思ひ誤つて居る點、また多少の潤色が施されて居るらしい點は遺憾であるが、とにかく炭蓮と氏正の面目が躍如として居るから、原文を抄録する。

(炭) 又牛蓮ト鼻金剛、霜月春日祭ニ下リ、松ノ下ニテ床木ノ立所ヲ争フ。金春ノ床木ヲ三谷ト云者上ニ立ル。鼻金剛懷中ヨリ脇指取出シ、「推參ナル奴」ト云、突ントスル。牛蓮モ強キ人ニテ、「往古ヨリ春日ノ大夫今春也」トテ既ニ喧嘩ニナル。衆徒扇ヲ上げ、「狼藉也狼藉也」ト云。鼻金剛「命ヲ捨ル上ハ狼藉モ入ルマイ」ト云、事濟ズ。サレバ春日ノ前ニテ幣圖ヲ上テ夫次第ニセント衆徒云、幣圖ヲ上ル。一ノ圖鼻金剛取ル。「サラバ床几ヲ上ニ立ン」ト云。牛蓮「圖ニ劣ケタリトモ、中々下ニ立ジ」ト云ヤブル。ソコニテ衆徒「ニクキ今春哉」

春日ノ神慮ヲ破ル事前代未聞ノ曲事也」トテ散々アシキシマツニテ牛蓮アバルル、紙上ニモ書付カタシ。大和ニ居ルモ牛蓮迷惑ガリ、大和ヲ走落ツ。此内一兩年金剛方ヨリ專ニ春日ノ神事ヲ執行ス。サレドモ流石ニ春日ノ大夫ナルニヨリ大和ニ歸リ、前世ノ如ク一番ニ床木ヲ被立ル。扱鼻金剛ハ大太夫果ルト能ニ自慢シ、其ノ上我意ナル生付故、我儘ヲ云。牛蓮モ能ハ劣リタレドモ一段スネキ人ニテ、ツイニ金剛ノ跡ニハ不付シト也。

この紛糾の結末が何うなつたかは記録の上では明かでないが、「四座役者目録」の記載から察すると、結局、觀世・寶生・金春の三座同盟の罷業が成功して、金春が奈良に召し歸され、金剛の上座に着くことになつた模様で、最後は氏正が屈伏したものらしい。

氏正の藝風は一言にして言へば豪宕絢爛で早技のものを得意とし、殊に長刀をよく使つたと云ふ。若い時、「禪師會我」を演じて、キリの「吽欠に貫かれ」といふ所で一疊臺の上から宙返りをして飛び下り、觀衆の肝を奪つたといふ話がある。然し、時々無茶な真似もしたらしく、春日の神事能に「熊坂」を舞ひ、キリの「この松が根の」といふ所で神木を指す型をして、識者の聲を聞いたやうなこともあつた。尤も晩年には次第に藝が圓熟して葛物などをよくするやうになつた。天正三年、六十九歳の時、春日で「關寺小町」を舞つたが、流石の氏正もこれは充分にこなせなかつたと言はれて居る。この翌年、氏正は七十歳で永逝した。

第三節 觀世元尙と金剛久次

觀世宗節の跡を繼いだ元尙は天文八年に生れた。(但し一説には天文五年生とある)金剛氏正の嫡子孫太郎久次は系圖は天文七年生とあるが、實は天文三年生れたものゝやうである。とにかくこの二人は略々同年輩と見てよい。

たものと思はれる。

この問題は天文十三年に至つて再燃し、又もや大騒動になつた。今度は炭蓮も頑として一步も退かない。結局、春日の神前で神鬮を取つて解決する事になつた。所が、神鬮の結果は金春の負けであつた。然し、炭蓮は、それではと云つて金剛の下座に坐るやうな男ではない。一座を率ゐて山城へ引き上げてしまつた。かうなると、觀世も寶生も黙つて居ない。金春が歸つて來ない限り、自分等も神事に従ふわけには行かない、と強硬に主張して譲らない。結局、この年の神事は金剛一座で勤めたのであつた。無論、後日猿樂も金剛一座で演つた。能は六番あつて、「難波」・「定家」・「吳服」の三番を氏正が、「敦盛」・「殺生石」・「槿」の三番を嫡子孫太郎久次が勤めた。この時久次は十一歳であつた。

この金春・金剛兩座の評論は全く前代未聞の騒動でかういふ事件の起つたのも、畢竟は興福寺の勢力が衰頽したためである。この評論の様子は「四座役者目録」に委しく記されて居る。天文十年・十三年の兩度の紛争を一度のやうに思ひ誤つて居る點、また多少の潤色が施されて居るらしい點は遺憾であるが、とにかく炭蓮と氏正の面目が躍如として居るから、原文を抄録する。

(炭) 又牛蓮ト鼻金剛、霜月春日祭ニ下リ、松ノ下ニテ床木ノ立所ヲ争フ。金春ノ床木ヲ三谷ト云者上ニ立ル。鼻金剛懷中ヨリ脇指取出シ、「推參ナル奴」ト云、突ントスル。牛蓮モ強キ人ニテ、「往古ヨリ春日ノ大夫今春也」トテ既ニ喧嘩ニナル。衆徒扇ヲ上ゲ、「狼藉也狼藉也」ト云。鼻金剛「命ヲ捨ル上ハ狼藉モ入ルマイ」ト云、事濟ズ。サレバ春日ノ前ニテ幣鬮ヲ上テ夫次第ニセント衆徒云、幣鬮ヲ上ル。一ノ鬮鼻金剛取ル。「サラバ床几ヲ上ニ立ン」ト云。牛蓮「鬮ニ劣ケタリトモ、中々下ニ立ジ」ト云ヤブル。ソコニテ衆徒「ニクキ今春哉」

春日ノ神慮ヲ破ル事前代未聞ノ曲事也」トテ散々アシキシマツニテ牛蓮アバルル、紙上ニモ書付カタシ。大和ニ居ルモ牛蓮迷惑ガリ、大和ヲ走落ツ。此内一兩年金剛方ヨリ專ニ春日ノ神事ヲ執行ス。サレドモ流石ニ春日ノ大夫ナルニヨリ大和ニ歸リ、前世ノ如ク一番ニ床木ヲ被立ル。扱鼻金剛ハ大太夫果ルト能ニ自慢シ、其ノ上我意ナル生付故、我儘ヲ云。牛蓮モ能ハ劣リタレドモ一段スネキ人ニテ、ツイニ金剛ノ跡ニハ不付シト也。

この紛糾の結末が何うなつたかは記録の上では明かでないが、「四座役者目録」の記載から察すると、結局、觀世・寶生・金春の三座同盟の罷業が成功して、金春が奈良に召し歸され、金剛の上座に着くことになつた模様で、最後は氏正が屈伏したものらしい。

氏正の藝風は一言にして言へば豪宕絢爛で早技のものを得意とし、殊に長刀をよく使つたと云ふ。若い時、「禪師會我」を演じて、キリの「吽欠に貫かれ」といふ所で一疊臺の上から宙返りをして飛び下り、觀衆の肝を奪つたといふ話がある。然し、時々無茶な真似もしたらしく、春日の神事に「熊坂」を舞ひ、キリの「この松が根の」といふ所で神木を指す型をして、識者の聲を聞いたやうなこともあつた。尤も晩年には次第に藝が圓熟して萬物などをよくするやうになつた。天正三年、六十九歳の時、春日で「關寺小町」を舞つたが、流石の氏正もこれは充分にこなせなかつたと言はれて居る。この翌年、氏正は七十歳で永逝した。

第三節 觀世元尙と金剛久次

觀世宗節の跡を繼いだ元尙は天文八年に生れた。(但し一説には天文五年生とある)金剛氏正の嫡子孫太郎久次は系圖は天文七年生とあるが、實は天文三年生れたものゝやうである。とにかくこの二人は略々同年輩と見てよい。

二人とも藝は相當に出來たやうであるが、申し合せたやうに短命で、父に先立つて世を去つた。なほ金春炭蓮にも此の二人と同年輩の男子があつた。これは小禪鳳と異名を取つた程の麒麟兒であつたが、前の二人よりも更に短命で、少年期を出でずして世を去つたらしい。

觀世元尙が養父の名跡を繼いで八代目（實は九代目）の觀世大夫になつたのは永祿十年頃と推定される。養父の元忠は永祿十年二月には既に入道して宗節と號して居たことが記録の上で明かである。元忠は此の年丁度六十歳になるので、それを期として入道したものであらうと思はれる。そして、それと同時に元尙が觀世大夫を繼いだのであらう。然りとすれば、彼は二十九歳で觀世大夫となつたものである。

然し、元尙が觀世大夫として京都に居つたのは僅か三四年で、元龜の初年には父の宗節と共に遠州濱松に下つてしまつた。従つて彼が中央の能樂界に残した足跡は極めて小さなものであつた。

遠州へ下つてからの元尙の動靜は明かでないが、『當代記』には彼が宗節と共に濱松城内で演能したといふ記事が一見見える。

元尙の死んだのは天正五年の春で、享年は三十九歳（一説には四十二歳）であつたと傳へられて居る。なほ『當代記』には元尙の死に關しては怪談めいた話が載せてある。即ち、元尙の死ぬ少し前に京都へ殘して來た元尙の妻が、蘆毛の馬に乗つて三州吉田の元尙の寓居へ訪ねて來た。そして馬に積んで來た荷物を下す所まで諸人の目に正しく見えたのだが、それが幻影であつたといふ。後に聞けば、同日の同時刻に元尙の妻は京都で死んだのであつた。この事があつて程なく元尙が患ひつき、幾ばくもなくして歿した、といふのである。何だか薄氣味の悪い話である。

元尙の死んだ時、嫡子身愛（黒雪）は僅か十二歳の少年であつた。然し、幸ひなことには祖父の宗節が未だ健在であつた。身愛は宗節の手許に引き取られ、その養育を受けて人となつたものであらう。

宗節は天正十一年、七十五歳で歿した。

金剛孫太郎久次は金剛家の系圖に依れば天文七年に生れ、永祿七年に二十七歳で歿したとあるが、彼の出生は實は天文三年であると思はれるから死んだのは三十一歳であつたらう。この時、父の氏正は五十七歳であるから、無論、未だ第一線を退いては居なかつたに違ひない。従つて久次は金剛大夫にならずに死んだものと思はれる。

然し、久次は幼少の頃から能を舞つて居るから、一生の演能回数は割合に多かつたらうと思ふ。彼の初舞臺は、恐らく天文八年十一月二十八日の若宮祭の後日猿樂の折であつたらう。久次は此の時に「西王母」・「天鼓」・「狸々」の三番を演じて居る。「天鼓」は多分半能にして演じたものと思はれるが、それにしても久次は此の年僅かに六歳である。相當の麒麟兒であつたことが想像される。

天文十年十一月二十八日、これは金春と金剛の第一回の座論のあつた其の翌日であるが、この日の後日猿樂に久次は「花月」を舞つて居る。この日は四座立合で、觀世十郎大夫・寶生重勝・金春宗瑞・同炭蓮・金剛氏正といつた錚々たる人々が出演した。その中に交つて僅か八歳の久次が演能したことは確かに異彩を放つものがあつたらうと思はれる。

天文十二年二月、久次は父に代つて新能に勤仕し、金春炭蓮と伍して演能して居る。恐らく倨傲な氏正は炭蓮と立合で能を舞ふことを快しとせず、久次をして代勤せしめたものであらう。なほこの時の能に金春長正丸といふ少年が出演して居るが、これが前に述べた炭蓮の嫡子で小禪鳳と異名を取つた天才兒であらう。天文十三年十一月、この時は前にも述べた如く金春と金剛の座論の結果、觀世・寶生・金春の三座が同盟して神事能に出演せず、結局、金剛一

座で演能した。この時、久次は「敦盛」・「殺生石」・「権」の三番を勤めた。

斯様に幼少の頃から父氏正の片腕となつて活躍したのであるが、不幸にして夭折した。久次が死んだ時、その遺児は僅かに三歳であつた。當時は父氏正が未だ健在であつたが、その氏正も天正四年に死んでしまつたので、同座の脇師であつた金剛又兵衛康季が金剛大夫となつた。久次の遺児は康季の跡を受けて金剛大夫になつた。これが金剛右京勝吉である。

なほ久次の弟四郎左衛門勝政は寶生重勝の妹娘と結婚し（姉娘は久次の妻）、其の名跡を繼いで寶生道喜と稱した。

第六章 安土桃山時代の能樂

第一節 金春禪曲と下間法印

天正十一年に觀世宗節と金春炭蓮の二元老が歿した後は（寶生重勝はこれより十一年前に、金剛氏正は九年前に歿して居る）炭蓮の次男安照（禪曲）が斯界の第一人者であつた。彼は天文十七年の出生であるから、天正十一年には既に三十六歳である。觀世宗節の跡を繼いだ元尙は八年前に、金剛氏正の嗣子久次は十九年前に歿し、元尙の嗣子身愛（黒雪）は未だ十八歳、久次の嗣子勝吉とても二十一歳の若年である。寶生重勝の名跡を嗣いだ道喜は二十六歳である。脇方から出て金剛大夫を繼いだ金剛又兵衛康季さへも三十歳で、禪曲よりは六つ年下である。斯様な次第で、禪曲は四座の大夫の中の最年長者であり、しかも技藝に於いて群を抜いて居た。それも當然で、彼は三十六歳まで父の膝下にあつたのであるし、他の人々は何れも幼少にして父に死別したため、正規の修行をして居ない。金剛又兵衛康季だけは別だが、これとても仕手方として正規の修行を積んだ人ではなく、大夫の嗣子が幼少であつた爲に、脇方から轉じて大夫になつたのである。従つてこれから當分の間は禪曲の一人天下であつたのである。

所が此處に下間少進法印といふ妙な人間が居た。彼は能役者ではない。本願寺の家老であるが、金春炭蓮の弟子で、なまなか玄人は及びもつかない技倆を持つて居た。禪曲と立合で能を舞つても、一般は何れの藝が上か判斷に迷つたと云ふ。勿論、禪曲には遠く及ばなかつたのであるが、それにしても大層な腕前であつた。金春の流れを汲む人

の中に斯ういふ人が居たことは、金春座に取つて非常に幸福なことで、その爲に金春の論が上層階級の人々の間へズン／＼と廣がつて行つたらしい。それは勿論、禪曲の聲價が非常に高かつたことにも依るが、下間少進法印のやうな人が居なかつたから、あれまでの繁榮は見る事が出来なかつたに違ひない。

この傾向に愈々拍車をかけたのが豊臣秀吉である。秀吉は暮松新九郎と云ふ能役者に就いて金春の能を學び、折ある毎に自ら舞臺に立つて演能した。その熱心さは全く桁外れであつて、この爲に能は非常に盛んになつた。そして殊に金春が世に時めくことになつたのである。

歴代の爲政者の中には、能に興味を持ち、これを後援した者も少くない。然し、秀吉のやうな人は後にも前にもなかつた。彼のは後援といふより、むしろ耽溺であつた。こゝに彼の耽溺ぶりの一例を紹介しよう。

秀吉は文祿二年十月五日から三日に亘つて禁中で能を催し、天覽に供した。その時の能組が今に残つて居るが、これが實に大變なものである。その全部を掲げるわけには行かないから、曲名と演者名を列記する。

初日	翁 豊臣秀吉	翁 暮松新九郎	翁 金春大夫
弓八幡	豊臣秀吉	老松 豊臣秀吉	吳服 豊臣秀吉
芭蕉	豊臣秀吉	定家 豊臣秀吉	田村 豊臣秀吉
皇帝	豊臣秀吉	鶴飼 蒲生氏郷	松風 豊臣秀吉
源氏供養	豊臣秀吉	遊行柳 丹波少將秀勝	江口 豊臣秀吉
千手	岐府中納言	大會 豊臣秀吉	雲林院 豊臣秀吉

即ち、秀吉は初日 六番(翁を含む)二日目に三番、三日目に七番、都合十六番の能を舞つて居る。なほ二日目は徳川家康を相手に狂言「耳引」をも演じて居る。その絶倫なる精力に驚嘆すると共に、如何に好きでも、かうなつては娛樂を通り越して労働ではなかつたかと思はれる。これほどまで能を愛好し、能に耽溺した者は二人とあるまい。たゞ／＼呆れるばかりである。

なほ敵と對陣中にも陣所で能を催したり、能の稽古をしたりして居たといふことが記録の中に散見する。その外、既に廢滅に瀕して居た薪能を再興させたり、四座の大夫に俸祿を與へて其の生活を安定せしめたり、秀吉が能樂の發展に力を盡したことは一再に止まらなかつた。その結果、四座ともに活氣を得たが、就中金春座の繁榮は見るべきものがあつた。

所が、秀吉が薨じて、政治の中心が、江戸へ移ると同時に、斯界の狀勢も次第に變り始めた。機を見るに敏な禪曲は、これは一刻も早く江戸へ下つて徳川家の庇護を頼むに如かずと悟つて、慶長十一年四月、一座の者を引きつれて關東へ下つた。然し、これは少し時機が早すぎた。途中、駿府に於いて家康に謁し、この旨を述べると、家康が言ふには「それは未だ時機が早すぎる。今は江戸城の普請でゴタついて居て、能どころではない。マア一先づ立ち戻つて時機を待て」との事なので、禪曲も止むを得ず引き返した。然し、同年の冬には江戸城の普請も大體完成し、十一月

には逸早く観世黒雪が一座を率ゐて江戸へ下つて行つたので、もはや大丈夫と禪曲は再び一座の者と共に江戸へ下つた。これが同年の十二月であつた。

かくして能樂界の中心は京都から江戸へ移動したのである。

第二節 観世、黒雪

観世身愛（黒雪）は永祿九年に生れ、十二歳にして父元尙に死別し、十八歳にして祖父宗節を失つた。それまでに

謡は一通り稽古し終つて居たが、その後も古津宗印や観世又九郎了叱に就いて稽古を積んだ。

古津宗印といふ人は、観世彌次郎長俊の次男である。長俊の長男は小次郎元頼と云つて、これは父に劣らぬワキの名人であつた。この元頼の女子が観世元尙の妻となつた。これが黒雪の母である。従つて古津宗印は黒雪に取つては外祖父の弟に當る。宗印といふ人は藝はさして上手といふ程ではなかつたが、非常な物知りであつて、教育者として

は申し分ない人であつた。黒雪は、祖父宗節の死後は主として此の人に就いて學んだのである。

観世又九郎了叱は元頼の三男であるから、黒雪のためには母方の叔父に當る。この人は十一歳で父元頼に死別し、それからは家に傳はる青表紙本（曾祖父信光の自筆謄本）を持つて宗節に就いて謡を稽古した。謡は中々達者であつたと云ふ。黒雪はこの人にも謡を稽古したと傳へられて居るが、了叱は寛永三年に六十一歳（一説には六十二歳）で歿したとあるから、黒雪より僅か二三歳しか年長でない。従つて稽古と云ふほどではなかつたかも知れないが、とにかくこの人にも多少學ぶ所はあつたものと思はれる。

観世から江戸幕府へ呈出した由緒書に依ると、宗節は死に家康に對して黒雪の將來をくれぐれ頼んで置いたら

しい。家康は其れを忘れずに若年の黒雪を色々と後援してやつた。例へば天正十四年の九月から十月へかけて家康は自分の領國である駿遠參甲の四州に下知を下し、三州吉田・三州新城・遠州見附・遠州掛川・駿州藤枝・駿州府中・甲州郡内の八ヶ所に於いて黒雪をして各々日數四日の勸進能を興行せしめて居るが、これも宗節の存命中の依頼に依るものであつたと云はれて居る。黒雪はこの時二十一歳であつた。

翌々天正十六年の二月、黒雪は南都の薪能に參勤し、五月には京都新大佛に於いて金春座と立合能を演じて居る。

この頃から次第に中央の能樂界へ進出したものと思はれる。

これからは家康の推舉に依つて豊臣家を初めとして諸大名の寵顧を受け、諸所に於いて演能して居る。この時代に於いて最も羽振の良かったのは前記の如く金春であつたが、それに次いで観世であつた。黒雪が四座大夫の中の最年少者でありながら、また観世座が父元尙の代から中央の能樂界と絶縁して居たにも拘らず、寶生・金剛の兩座を凌駕して、金春に次ぐ地位と勢力とを持ち得たことは、全く家康の庇護に依るものである。

慶長十一年十一月、黒雪は他座の大夫に先んじて一座の者を引き連れて江戸へ下つた。翌十二月には金春禪曲も一座を率ゐて下つて來た。その後は他座の役者も續々と江戸へ下り、能樂界の中心は大坂の落城より一足早く江戸へ移つてしまつたのである。

第七章 江戸時代の能樂

第一節 江戸草創期の能樂界

慶長十二年以後の江戸及び駿府を中心とした能樂界に於いて幅を利かせたのは觀世座と金春座であつた。

觀世座の棟梁黒雪は慶長十二年に四十二歳の働き盛りであつた。しかも其の一座には、福王神右衛門盛忠（ワキ）、進藤久右衛門久次（ワキ）、觀世又次郎重次（小鼓）、同勝次郎重政（大鼓）、同新九郎豊勝（小鼓）などといふ腕達者が揃つて居た。その上、大御所家康の後援があつたのであるから、全く鬼に金棒の觀があつたが、黒雪がつまらぬ事から短慮を起し、高野山に籠居したりなどして、家康の感情を害したため、一座の繁榮が一時停滞した。然し、やがて舊に復することを得たのは幸ひであつた。（この事件に就いては第二節に詳述する）

この觀世座に對して五角、若しくは其れ以上の勢力を振つたのが金春座であつた。棟梁たる禪曲は慶長十二年に六十歳、老いたりとも未だ鏝鏢たるものがあり、漸く圓熟の極に達した技藝は常に賞讃の的となつた。この人は中々長命で、元和七年に七十三歳で歿したが、それまでは斯界の元老として隠然たる勢力を持つて居た。禪曲には三人の男子があつた。長男七郎氏勝、次男八左衛門安喜、三男大藏庄右衛門氏紀、いづれも相當の達者であつたから、この一座の顔ぶれも中々充實して居た。

尤も、禪曲の嫡子七郎氏勝は慶長十五年に三十五歳で早世した。遺子重勝は未だ十五歳の少年であつた。氏勝の早

世は金春座に取つて相當大きな打撃であつたには相違ないが、とにかく一座の棟梁たる禪曲が未だ健在であり、その上、次子の八左衛門安喜といふ人が相當の上手であつて、この人が氏勝の遺子重勝の輔導に當つたから、金春座の將來に格別の不安はなかつた。その上、下間少進法印が江戸へ下つて來て、禪曲と共に活躍し始めたから、この一座の勢力は實に隆々たるものがあつた。

これに引きかへ、慘憺たる状態に在つたのは金剛座であつた。鼻金剛氏正の死後、脇方から轉じて金剛大夫となり、金剛座の危機を救つた金剛又兵衛康季は既に慶長四年に四十四歳で歿し、代つて鼻金剛の嫡孫右京勝吉（孫太郎久次の遺兒）が金剛大夫となつたが、この人も短命で、慶長十五年に四十九歳で死んだ。勝吉の嫡子は三郎勝久と云つたが、この人は更に短命で、慶長十二年に二十六歳で父に先立つて歿した。後に残つたのは、勝久の遺兒右京頼勝で、これが未だ十二歳の少年であつた。一族の中に、この少年の輔導に當る人物がなかつたので、當時金剛座に屬して居た喜多七太夫が金剛大夫となり、併せて頼勝の指導に當ることになつた。

この喜多七太夫といふ人は泉州堺の産で、元來は素人であつたが、謂はゆる天才であつて、七歳の時には既に立派に能を舞ひ、七ツ大夫と謳はれたと云ふ。長ずるに及んで豊臣秀吉の寵を受け、その計らひで金春禪曲の女婿となつたが、禪曲は其の才能の餘りに傑れて居るのに恐れ、かういふ人物に充分な稽古をつけてやつたら恐らく子孫の繁榮の妨げになるであらうと考へて、餘り稽古をしてやらなかつたと云ふ。従つて七太夫は禪曲とは餘り仲が良くなく、その爲に金剛座に屬して居たものと思はれる。七太夫は天正十四年生れであるから、慶長十五年、金剛右京勝吉の跡を受けて金剛大夫となつたのは二十五歳の時である。いかに彼が傑物であつても、二十五歳では未だ觀世や金春の向うを張つて五角の勝負は難しい。即ち、慶長から元和へかけては彼の雌伏期であつたと見てよからう。彼が目ざまし

い活躍をし始めるのは勝吉の遺子頼勝に金剛大夫を譲つて喜多七太夫と名のつてからで、年代で言ふと、寛永に入つてからである。

寶生座の大夫は、鼻金剛の末子で古寶生の名跡を繼いだ寶生道喜であつたが、この人は大した技倆の持主ではなく、殆ど目立つた活躍をして居ない。

江戸草創期に於ける四座の状勢は大略右の通りであつた。第二節以下に於いては這般の消息を年次を逐うて敘述する。

第二節 觀世黑雪と金春禪曲

附、梅若玄詳の擡頭

慶長十一年冬、觀世黑雪と金春禪曲とは夫々一座を率ゐて江戸へ下つた。將軍秀忠は兩座助成の意味を以つて翌十二年の正月七日から三日間に亘つて江戸城で兩座の立合能を催した。この能に觀世黑雪・金春禪曲・同氏勝の三人は將軍家から白銀百枚を拜領し、その外の役者も應分の金子を拜領した。『當代記』の記載に依ると、初日の能の最中、神田に大火があり、二百餘軒が焼亡し、その爲に陪觀を許されて芝居に在つた町人が皆退出した、とある。して見れば、この能は後世に謂ふ所の町人能の前驅であつたわけで、その意味でも注目し得る能であつた。

秀忠は更に兩座に命じて、同年二月中旬、江戸城の本丸と西の丸の間で勸進能を興行させて居る。將軍秀忠・前將軍家康を始めとして諸大名が臨場し、中々の盛況であつた模様である。

かうした情勢を見て、寶生・金剛兩座の大夫も江戸に下つて來た。その時期は明かでないが、とにかく翌十三年八

月二十七日の駿府淺間神社の神事能には四座の大夫が顔を揃へて參勤して居るから、その以前に下つたことは確かである。

この日の能は全部で十二番あり、觀世黑雪が翁附脇能以下五番、金春禪曲が四番、金春氏勝、寶生道喜、金剛勝吉の三人が各々一番を演じて居る。これに依つて當時に於ける四座の勢力が略々推測されるであらう。

この當時は將軍秀忠が江戸に在り、前將軍家康が駿府にあつて、双方で催能があつたから、四座の役者は江戸と駿府の間を絶えず往復して居たわけで、これは中々樂ではなかつたらうと思はれる。

その一例として、慶長十四年の夏から秋へかけての金春禪曲父子の動靜に就いて述べよう。この年の四月二十八日、駿府城内に於いて家康の慈子長福丸（後の紀伊頼宣、當時八歳）が能を舞ひ、その翌日には四座の立合能があり、禪曲父子はこの能に出演して居る。なほその翌日（五月一日）にも能があり、禪曲父子は丹波猿樂の梅若や金剛勝久の遺兒龜千代（頼勝）などと共に演能して居る。この能を勤めると、禪曲父子は駿府を立つて江戸へ向つた。そして五月六日には江戸へ到着して居る。これは此の月の十七日に將軍秀忠が藤堂和泉守高虎の邸を訪れるので、その饗應の能に召されたものである。かくして十七日には藤堂邸に於ける將軍家饗應能に出演し、また翌十八日には同邸に於ける在江戸諸大名招待の能に出演し、更に同月二十九日の江戸城に於ける催能に出演して居る。なほ月日は不明であるが、この外に江戸城に於ける催能に二度、伊達政宗の邸に於ける催能に一度、都合六度の能に出演し、同年七月十日、再び駿府へ歸つて居る。かういふ状態で、かなり忙しかつたらうと思はれる。

なほ右記事中に丹波猿樂の梅若が駿府城内で禪曲父子と共に演能した旨を述べたが、これが梅若の駿府に於ける演能の最初であらうと思はれる。

梅若は元來丹波猿樂の舊家で、古い所では應永年中に梅若大夫なるものが後小松法皇の寵遇を辱うし、屢々仙洞御所に召されて演能して居ることが記録に残つて居る。その後は餘り上手な大夫も現れなかつたらしく、中央の能樂界とは殆ど絶縁状態にあつたが、織豊期に至つて梅若妙音大夫なるものが現れ、中央へ進出して來た。さして上手といふのではなかつたらしいが、「春近」のやうな現在物は中々よくやつたといふことが『四座役者目録』に見えて居る。この妙音大夫の子に九郎右衛門（玄詳）といふ者があつた。これが前記の駿府城内の能に出演した梅若である。父の妙音大夫もさうだつたが、この九郎右衛門も觀世黑雪のツレを勤めたことが度々あつた模様である。何時駿府へ下つたかは明かでないが、慶長十四年三月二十六日、豊太閤在世の時から能役者が代り合つて大阪城へ詰めることになつて居たのを改めて、今後は駿府城に相詰むべき由が家康に依つて發令された。恐らく此の命令に應じて駿府へ下つたものであらうと思はれる。『四座役者目録』に依れば、この九郎右衛門は親の妙音大夫よりまた下手であつたらしいが、不思議に家康の氣に入つて、翌慶長十五年五月初旬には家康の許可を受けて駿府に於いて五日に亙る勸進能を催し、また同月十五日には淺間神社の神事能を勤めて居る。この時には家康がわざわざ見物に出かけて居る。かく梅若が家康の寵遇を受けて居るのを見て甚だ面白くなかつたのが觀世黑雪である。かつては自分のツレを勤めて居た人間が自分を差し置いて單獨で能を張行するさへ面白くないのに、それを家康がわざわざ見物に出かけて行つたのだから、黑雪も腹の蟲を抑へかねたものと見え、とう／＼えちい事を仕出來した。それは梅若が淺間神社で演能してから丁度八日目、即ち五月二十三日の事である。

この日、駿府城内では上杉景勝・伊達政宗の兩名を饗應する爲に長福丸が演能することになつて居り、その『翁』は家康の命に依つて黑雪が勤めることになつて居たのであるが、黑雪は其の前夜剃髮して姿を晦ましてしまつたので

ある。これは家康が梅若を餘り最賈するので、それを憤慨して、この暴舉を敢てしたものと推測されるのであるが、隨分思ひ切つたことをやつたものである。駿府を逐電した黑雪は高野山へ上つて籠居して居たと云ふ。

この黑雪の暴舉に依り、觀世座の前途は暗澹たるものになつてしまつた。それに引きかへ、益々優勢になつたのは金春座である。しかも翌慶長十六年には下間少進法印が下つて來たので、いよ／＼多士濟々となり、江戸でも駿府でも盛んに演能して居る。

觀世黑雪は慶長十七年二月に赦免せられ、翌慶長十八年三月五日、駿府城内で催された能に久方ぶりに出演し、翁附協能及び祝言を勤めて居る。なほこの月の二十八日・二十九日の兩日に亙つて駿府城内で能があり、兩日に十八番の能が演ぜられたが、その内譯は、長福丸が四番、金春禪曲が八番、下間少進が四番、觀世黑雪が三番、梅若玄詳が一番であつた。金春が壓倒的に優勢であつたことは此の番組に依つても瞭然たるものがある。

斯様に金春座の優勢は觀世黑雪の歸參後も依然として續いたのである。金春禪曲は老いて益々壯健、その年の四月五日には駿府城内で下間少進法印と立合能を演じ、更に六月には小進と相携へて江戸に下り、各所で演能して居る。翌慶長十九年の春、少しく健康を害した模様で、三月十二日の、駿府淺間神社の能には出演を控へて居たが、程なく恢復して又々花々しく活躍を始めた。かくして金春座の優勢は禪曲の晩年にまで及んだ模様である。

禪曲は元和七年に七十三歳で歿したが、この頃に至つて觀世黑雪は漸く昔日の勢力を取り戻したらしく、將軍秀忠の許可を受け、同年二月二十八日より三月朔日まで三日間、江戸御成橋外（今の櫻田）に於いて勸進能を興行して居る。禪曲の死後は黑雪の天下であつたらしいが、その黑雪も寛永三年に六十一歳で死んだ。これからが喜多七大夫の活躍時代になるのである。

第三節 喜多七太夫の活躍

慶長十五年、金剛右京勝吉の跡を承けて、金剛座の棟梁となつた喜多七太夫の其の後の動靜は餘り明かでない。「當代記」の記す所に依れば、七太夫は金剛三郎大夫と稱して、同年三月下旬、泉州堺に於いて勸進能を興行して居る。前にも述べたやうに堺は七太夫の生れた土地であるから、この勸進能は正に故郷に錦を飾らうとする意圖の下に行はれたものと見てよからう。なほ七太夫は引き續いて四月上旬に京都でも勸進能を興行して居る。彼の得意や想ふべしである。然しこの後の七太夫の消息は杳として判らないのである。

彼が金剛勝吉の嫡孫頼勝に金剛座の大夫職を譲つたのは何時頃であつたか、それさへも明かでないが、傳ふる所に依れば、七太夫は大阪夏の陣に豊臣方に屬して奮闘し、落城後は筑前博多に忍んで居たと云ふ。恐らくこの以前に大夫職を頼勝に譲つて居たものであらうと想像される。

彼が再び世に出たのは元和四年で、これに就いては筑前博多の城主黒田如水が色々と奔走して、將軍秀忠に赦免を乞うたものゝやうである。四座の外に喜多が一流として公認されたのも、それから間もなくであつたらうと想像される。何故に喜多のみを座と言はずに流と言ふかと云ふに、喜多は他の四座の如く專屬のワキ方・囃子・方狂言方を有しないからで、従つて其の棟梁も喜多大夫と稱することを許されなかつたが、實際に於いては他座の大夫と何等異なる所なき待遇を受けて居た。

かくして青天白日の身となつた七太夫も、流石に暫くの間は目ざましい活躍をして居ない。然し元和七年に金春禪曲が歿し、寛永三年に觀世黒雪が逝いて後は、彼は名實共に斯界の第一人者であつた。七太夫は寛永三年に四十一歳

であるが、四座の大夫は何れも彼よりは後輩で、彼と五角の太刀打の出来る者は一人もなかつた。觀世座の大夫は黒雪の次男左近重成(安休)で、この人は後には宗節以來の上手と謳はれた程の達者であるが、當時は未だ二十五歳の若年であつたから、七太夫と對抗するだけの實力は到底なかつたものと想像される。金春大夫重勝は三十一歳であるが、この人は、前にも述べたやうに、幼少にして父氏勝に死別し、その後は叔父八左衛門安喜の指導を受けて居たのであるが、長ずるに及んで安喜と確執を生じ、遂に義絶した爲に、藝も充分とまで行かなかつたと云はれて居るから、これも七太夫の敵ではなかつたと思はれる。金剛大夫頼勝は二十八歳であつたが、これも嘗ては七太夫の後見を受けて居た人物であるから、とても七太夫に頭は上らなかつたに相違ない。實生は道喜の息男である重房(休清)が大夫であつたが、この人も七太夫に藝を習つたと傳へられて居るから、金剛頼勝と同様、七太夫には頭が上らなかつたらうと思はれる。斯様に四座の大夫が悉く彼の後輩であつたから、彼は意のままに活躍することが出来たのである。

時は既に三代將軍家光の代であつたが、前將軍秀忠も未だ健在であつた。秀忠は七太夫をして喜多流を立てさせた位で、もともと七太夫最眞の人であつたが、この人が頻りに七太夫を後援した爲に、七太夫の勢力は益々強大になつたものゝやうである。「徳川實記」に記す所を見ても、寛永五年から八年までの間は全く七太夫の一人舞臺の觀がある。這般の消息を示す爲に、「徳川實記」の演能に關する記事を抄録する。

秀忠及び家光の所望で七太夫が演能した記事には△印を附して區別した。

○寛永五年三月四日、大御所紀伊大納言頼宣卿のもとに臨駕あり。(中略)書院にわたらせ給ひて能はじま
る。竹生嶋、八島、江口、紅葉狩、天鼓、橋辨慶、祝言なり。御所望にて喜多七太夫、藤榮をつかふまつる。

○寛永五年三月十五日、大御所けふ仙臺中納言政宗卿のもとへならせたまふ。(中略)かくて例の如く茶宴はて、猿樂。白鬚、忠度、熊谷、鶴、船辨慶、自然居士、祝言。また御好にて喜多七太夫善知鳥をつかふまつれり。

△寛永五年四月三日、大御所水戸中納言頼房卿のもとへならせ給ふ。(中略)御茶事畢て猿樂あり。白樂天、清經、野々宮、黒塚、杜若、野守、祝言なり。こと更御好にて今春山姥をつかふまつる。

○寛永六年二月十三日、大御所けふ駿河大納言忠長の邸にならせ給ふ。(中略)申樂御覽。玉井、頼政、千手、船辨慶、野守、殺生石、祝言。また御所望にて喜多七太夫藤榮をつかふまつる。

○寛永六年四月五日、御痘癒させ給ひて後、初て西城にならせ給ふ。御饗宴七五三、猿樂あり。難波、朝長、誓願寺、鶴、蟹人、壇風、猩々、狂言四番、膏藥練、釣狐、武悪、墨塗。また御所望により喜多七太夫安宅をつかふまつる。

△寛永六年五月二十三日、駿河大納言忠長卿邸に臨駕あり。(中略)猿樂。白樂天、經政、源氏供養、紅葉狩、國栖、櫻川、猩々。御所望にて金春花月をつかふまつる。

○寛永六年六月一日、駿河大納言邸に大御所臨駕あり。(中略)御茶事はて、猿樂。白鬚、忠度、杜若、藤榮、木賊、現在鶴、祝言。御所望により喜多七太夫船辨慶をつかふまつる。

○寛永六年八月十日、水戸中納言頼房卿のもとに臨駕あり。(中略)猿樂はじまる。白樂天、實盛、楊貴妃、道成寺、花月、鶴、祝言。御所望により喜多七太夫柏崎をつかふまつる。

○寛永六年八月十五日、大御所中納言頼房卿の邸にならせらる。(中略)能は九世戸、簾、千手、三輪、舍利、

天鼓、祝言。御所望により喜多七太夫自然居士をつかふまつる。

○寛永六年八月二十五日、御痘癒させたまふ御祝として西城に猿樂あるにより朝とくならせらる。諸大名皆見る事ゆるされ饗せらる。樂は玉井、兼平、熊野、石橋、玉葛、藤榮、雷電、熊坂、祝言。御所望により喜多七太夫海士をつかふまつる。

○寛永六年八月二十八日、土井大炊頭利勝が邸に臨駕したまふ。(中略)御茶はて、廣間へ渡らせ給ひて猿樂御覽あり。白鬚、清經、野々宮、葵上、櫻川、舍利、祝言。御所望にて喜多七太夫船辨慶をつかふまつる。

○寛永六年九月二日、大御所土井大炊頭利勝が邸にならせ給ふ。(中略)御茶畢て猿樂始る。竹生島、實盛、定家、道成寺、當麻、山姥、猩々。御所望により喜多七太夫鶴飼をつかふまつる。

○寛永六年九月二十一日。大御所本城へならせ給ふ。(中略)猿樂。江島、頼政、東北、土蜘蛛、富士太鼓、谷行、船辨慶、祝言なり。御好により喜多七太夫葵上をつかふまつる。

○寛永六年十月十五日、金地院にならせ給ふ。(中略)崇傳御茶奉り猿樂御覽せらる。高砂、忠度、千手、船辨慶、黒塚、熊坂、祝言なり。御好にて喜多七太夫海士をつかふまつる。

○寛永六年十月十七日、大御所金地院へ臨駕あり。(中略)猿樂御覽あり。加茂、實盛、源氏供養、花月、葵上、野守、祝言。別に御好ありて喜多七太夫是界をまふ。

○寛永七年正月二十九日、大御所酒井雅樂頭がもとへならせらる。(中略)御長袴召改給ひ申樂はじまる。白樂天、實盛、芭蕉、鶴、舍利、小袖會我、祝言。御所望にて喜多七太夫盛久をまふ。

△寛永七年二月二十日、大御所紀伊大納言頼宣卿にならせ給ふ。(中略)御炭御みづから遊ばされ御長袴に改

給ひ書院にて猿樂御覽じ給ふ。加茂、頼政、千手、車僧、天鼓、雷電、祝言。御所望にて觀世自然居士をつかふまつる。

○寛永七年二月二十三日、紀伊大納言頼宣卿の邸にらせ給ふ。(中略)猿樂。玉井、井筒、三輪、黒塚、船辨慶、祝言。御所望にて喜多七太夫熊坂を舞ふ。

△寛永七年四月六日、仙臺中納言政宗卿のもとへらせらる。(中略)能は翁、三番叟、加茂、實盛、熊野、葵上、船辨慶、是界。船辨慶は虎千代丸これをまひ、御好にて八左衛門鶴をまふ。

△寛永七年四月十一日、大御所仙臺中納言政宗卿のもとへらせたまふ。(中略)猿樂。江島、田村、芭蕉、百萬、天鼓、船辨慶、祝言御覽せらる。船辨慶は虎千代丸みづからつかふまつる。また御好により八左衛門、現在鶴をまふ。

○寛永七年四月十八日、薩摩中納言家久卿のもとへらせ給ふ。(中略)會所にて猿樂御覽あり。翁、高砂、清經、源氏供養、天鼓、黒塚、玉鬘、吳服。御好にて喜多七太夫櫻川を舞ふ。

△寛永七年五月四日、二丸園池の亭落成によりて大御所をむかへたまひ饗せらる。(中略)本城へわたらせたまひ能御覽。白樂天、清經(あるは田村)、千手、龍田、鞍馬天狗、天鼓、祝言。御好にて觀世皇帝をまふ。

○寛永七年九月二十八日、大御所本城にらせ給ひ、御茶事并猿樂あり。能は弓八幡、實盛、源氏供養、鶴飼、海士、百萬、大會、熊坂、祝言なり。御所望により喜多七太夫自然居士をまふ。

○寛永八年正月二十八日、大御所本城へわたらせ給ひ、(中略)猿樂。難波、敦盛、野々宮、紅囊狩、鍾馗、藤永、橋辨慶、祝言。重て御好により喜多七太夫通小町を舞ふ。

○寛永八年正月二十九日、大御所尾張大納言義直卿のもとへらせらる。(中略)猿樂。玉井。八島。松風、是界、邯鄲、春日龍神、祝言。御所望にて喜多七太夫熊坂をまふ。

○寛永八年五月九日、尾張大納言義直卿の邸へらせらる。(中略)猿樂御覽あり。御所望にて喜多七太夫熊坂をつかふまつる。

○寛永八年六月三日、大御所本城へ渡御あり。(中略)また本城にて猿樂催さる。高砂、籠、杜若、谷行、天鼓、善知鳥、祝言。又喜多七太夫御所望にて自然居士をまふ。

此處に蒐めたのは凡べて御乞能の記事である。御乞能といふのは豫定の能組が全部演了された後に主賓の希望に依つて追加される能のことである。従つて御乞能を演ずる者は當日の出演者の中の花形が選出されるのであつて、御乞能を舞ふといふことは非常な名譽であるわけである。

さて此處に蒐めた記事は江戸城及び大名の邸内に 能に關するものであつて、恐らく四座一流の棟梁が總出演して居るものと推測されるが、御乞能出演の度數に於いて喜多七太夫が斷然、四座の大夫及び准大夫を凌駕して居る。即ち、寛永五年から同八年に至る四ヶ年の間に御乞能に召し出された者は喜多七太夫の外には觀世左近重成・金春七郎重勝・金春八左衛門安喜の三名があるのみであり、しかも此の三名が各々二回しか出演して居ないのに對し、喜多七太夫の出演度數は二十一回といふ壓倒的な數字を示して居る。そして、熊坂が四回、自然居士が三回、藤榮と海士が各二回に及んで居るが、恐らく此等は七太夫の最も得意とした曲に相違ない。従つて彼の藝風も略々想像がつくわけである。

閑話休題。この七太夫の舞つた御乞能の大部分が前將軍秀忠の所望に依るものである事を見ても、秀忠が如何に七

太夫を最眞にして居たかゝ判るであらう。かくして新興の喜多流は、斷然四座を壓して斯界の王座を占めたかの觀があつたのであるが、好事魔多し、喜多流の進路にも思はぬ暗礁が横たはつて居たのである。

寛永八年秋、前將軍秀忠が病床に伏した。しかも其の病狀甚だ面白からぬものがあつたので、上下一同の心痛は一通りでなかつた。八月二十一日には觀世・寶生の二座が秀忠の病氣全快祈願の爲に東叡山寛永寺に於いて法樂の能を催し、翌二十二日には金春・金剛・喜多の二座一流が淺草寺に於いて同じく法樂の能を行った。然し、その效もなく、秀忠の病狀は次第に悪化して、遂に翌九年正月不歸の客となつた。これは躍進の途上にあつた喜多流に取つては相當に大きな痛手であつたに相違ない。また喜多の繁榮を嫉視して居た人々は此の機會にこそ喜多の頭を抑へなくてはと心中私かに企む所があつたであらう。然し、得意の絶頂にあつた七太夫は恐らくさういふ事に對して些かも憂ふる所はなかつたらしく、それが蹉跎の原因であつた。

前將軍の薨去に依つて滿一ヶ年の間は演能が中止されたが、寛永十年春から再び舊に復した。この年の六月二十一日西丸に於いて催された能に七太夫は將軍家光の上意に依つて「頼政」、「熊野」の二番を演じ、また七月十七日、將軍家光が天海僧正を訪れた時には、御饗應の爲とあつて特に七太夫が召し出され、「邯鄲」「清經」「千手」「橋辨慶」「猩々」の五番を獨演し、相變らずの全盛ぶりを示して居る。

さて翌寛永十一年の冬の事である。久方ぶりに仙洞御所で御能が催されることになり、初日には觀世左近重成、後日には喜多七太夫が出演することに決定した。元來一介の素人から身を立てた七太夫が仙洞御所へ召され、四座筆頭の觀世大夫と兩日立合の能を行ふといふのであるから、これは全く破格の光榮と言はねばならない。七太夫の得意や思ふべしである。この時、彼は四十九歳であつた。

七太夫は、この能に「關寺小町」を舞つたのであるが、これが餘り好評でなかつた。その風聞は遂に將軍家光の耳に入り、圖らずも大問題になつたのである。

これは七太夫も少し考へが足りなかつたのである。何となれば「關寺小町」といふ曲は一子相傳の祕曲であつて、觀世では祐賢以來、金春では禪鳳以來、これを演じたものがないといふ程の大曲である。近代では鼻金剛氏正が死ぬ前年に奈良で演じたのが最後である。尤も、素人では下間少進法印が金春炭蓮から相傳を受けて演じて居る。これは前にも述べた如く炭蓮が命の恩を報ぜんが爲に一子相傳の禁制を破つて特に少進に傳へたものであるが、それとても一通りの傳授で、眞實の口傳はしなかつたと言はれて居る。これほどに重んぜられ、歴代の名人上手と言はれて居た人々も敢てこれを演じようとしなかつた祕曲を素人出身の七太夫が舞つたのであるから、甚だ大膽不敵な話で、増上慢の譏りは免れ得ない譯である。七太夫の心中は此の一番に依つて天下一の名を雲の上まで響き渡らせようといふのであつたらうが、中々さううまくは問屋が卸さなかつたのである。何と言つても傳統の重んぜられた當時のことであるから、一體七太夫は何人から「關寺小町」の傳授を受けたのかといふことが問題にされる。かうなると、七太夫の方は甚だ分が悪い。何故ならば彼が岳父の金春禪曲とは餘り仲が良くなく、禪曲が彼に對しては殆ど稽古をしてやらなかつたことは周知の事實であるからである。彼は恐らく下間少進法印の演出を見るか、又は傳へ聞いて、それに自己の創意を加へて演じたものであらうが、それでは當時の世間は通らない。この問題が世上に於て喧しく論議されたのは當然である。この事が遂に將軍家光の耳にまで達した。かうなると、問題は益々面倒になつて、遂に四座の大夫並びに頭取役者が召し出され、「關寺小町」に關して諮訊を受けることになつた。召し出された役者の中には、七太夫に同情して、自分は知らない旨を答へた者もあつたが、己れの家には傳はる所を率直に答へた者も少くなかつた。こ

の答へを綜合して考へると、七太夫の演出は正統なる傳承の上に立つものでないことが明かになつたために、七太夫及び其の相手をした葛野九郎兵衛（大鼓）・幸小左衛門（小鼓）・森田長藏（笛）の四名は藝事を軽々しく扱つたといふ廉で遂に閉門を命ぜられたのである。

この問題は勿論七太夫にも落度があるが、一つには七太夫の躍進ぶりが餘りに花々しいのを嫉視して居た人々が好機逸すべからずとばかりに騒ぎ立てた爲に重大問題化したものであると思はれる。従つて七太夫に同情を寄せる者も少くなかつたやうである。伊達政宗の如きも其の一人であつて、彼は七太夫外三名の者の赦免に就いて色々と骨を折つたやうである。即ち、翌寛永十二年正月二十八日、政宗は江戸城二丸に於いて將軍家饗應の宴を張り、柳生但馬守宗矩を始め能好きの大名を總動員して翁附十一番立の素人能を催し、なほ近侍の小童を集めて躍を興行し、將軍の機嫌を取り結んで置いて、七太夫外三名の者の赦免を乞うたのである。勿論、直ちに聽許せられ、四名の者は御前に召し出され、閉門を解かれたのである。

然し、以前の如く七太夫だけが特別の待遇を受けるやうなことは此の事件を期としてなくなつたらしく、この後は『徳川實記』の中に喜多七太夫の名を見る事は極めて稀になつてしまふ。

七太夫は承應二年正月七日に六十八歳で死んだ。彼の一生は實に波瀾に富んで居る。その行動より察して人格圓滿の士とは考へ難いが、ともかく一介の素人から身を起して四座の大夫の列に入り、更に一流を創立し、遂には四座の大夫を壓倒して斯界の第一人者と仰がれるに至つたのであるから、彼もまた偉人と云はねばならない。彼は偉大な天才であると共に、偉大な努力家であつたと思ふ。

第四節 江戸幕府と能樂

喜多七太夫（初代）歿後の江戸能樂界に就いては詳細な記述を省略する。また特筆に價する事件もないのである。四座一流とも非常な繁榮を見せ、名人上手が續々と輩出した。能樂が今日見るが如き洗練された藝術となつたのは全くこの時代に於ける名人上手の研鑽の結果であると言つても過言ではない。そして其れは偏へに江戸幕府の能樂保護策が寛嚴宜しきを得た爲である。

江戸幕府が四座一流の能役者に對して俸祿を給し、その經濟生活を安定せしめたので、能役者は後顧の憂へなく安心して藝道に精進することを得た。これが能樂の藝術的向上に與つて力あつたことは言ふまでもない。

然し、幕府は單なる能役者の保護者では決してなかつた。同時に嚴格なる監督者であつたのである。即ち、幕府は絶えず能役者の藝道精進の態度を監視し、必要に應じては戒告を發し、また不心得な役者は嚴重に處罰したのである。技藝優秀な役者を厚く賞したことは言ふまでもない。これが能樂が常に正道を履んで向上の一路を辿り、苟且にも時流に阿つて邪路に奔ることのなかつた最大の原因である。

江戸幕府が如何に嚴格な能樂の監督者であつたかは前節に述べた喜多七太夫の閉門事件に依つても充分推察出来るであらうが、なほ此處に好い實例があるから、それに就いて述べよう。

正保四年六月九日、幕府から能役者一同に對して將軍家の上意として一通の戒告が發せられた。その要綱は『徳川實記』に記されて居るが、それは次の如きものである。

各家々に傳へし技藝怠るべからず、身におはぬ藝をなさず、専ら家業の古法を守るべし。萬事一座の大夫の指(七)揮を守り、もし訴訟の事あらば、大夫をもて有司のもとへこふべし。大夫ひが事あらんには直に有司にうたふべし。

又猿樂催し給ふ事、前の日命ぜらるれば、大夫のもとへ會集し、よく試をなし、其朝に臨み過失あるべからず。先々の令の如く、よろづ奢らず、儉約を專とし、家屋衣服食物等、分に應じ、事かろくすべし。家業をすて、身に應ぜざる武藝など學ぶ事、停禁たるべし。

猿樂の衣類調度の外に無用の器財たくはふべからず。

大小名のまねきに應ぜざるとき、驕恣不禮のふるまひすべからず。

諸侯及權貴人々の座に陪せしとき、伴食すべからず。

また金春は數世名譽の聞えあり。しかるに今の大夫年既に長じながら、其藝未熟なり。今より後其藝をたしなむべし。はた一座老輩も心いれ輔導すべし。この後猶怠るに在ては曲事たるべしとなり。

時の爲政者が斯ういふ態度であつたから、能役者も油断は出来なかつた譯である。こゝに注意を興へられて居る金春大夫は八郎元信(即夢)で、この時は二十二歳であつた。この人は金春七郎重勝の嫡子であるが、父の重勝は寛永十一年に三十九歳で早世した。その時、元信は僅かに九歳であつた。前にも述べたが、元信の父の重勝も幼少の折に父氏勝に死別し、叔父の金春八左衛門安喜の後見に依つて一人前になつたのである。所が、重勝は長ずるに及んで安喜と確執を生じ、遂に義絶するに至つたため、その技藝も堂奥に達せずして終つたのであるが、臨終に際して深く元

信の將來を心痛し、多年義絶して居た安喜を枕邊に招じ、己れの過失を詫び、元信の輔導を依頼して永眠したのである。安喜は家藝の傳統の斷絶せんことを憂へて、宿怨を捨て、重勝の依頼に應じ、元信の輔導に盡瘁したのであるが、元信も長ずるに及んで安喜と不和になり、これまた遂に義絶するに至つた爲に、技藝も満足には行かず、遂に斯様な戒告を受くるに至つたものである。元信は安喜と義絶して後は安喜の弟である大藏庄右衛門氏紀や父重勝の弟である竹田權兵衛安信などに就いて學んだらしい。然し、元信は長命で、七十八歳まで健在であつたため、晩年には其の技藝も大いに進み、ともかく一部の人々からは名人と目されるに至つたらしい。或は正保二年の戒告が彼をして發奮せしめたものかも知れない。

閑話休題。この戒告を見ても、江戸幕府が能樂に取つて如何に厳格な監督者であつたか知られるであらう。幕府が斯ういふ態度で臨むのであるから、能役者も生活に不安がないからと云つて安逸を貪つて居る譯には行かない。殊に一座一流の大夫たる者は晏如としては居られない。先づ自らの身を慎むと共に門弟の監督を嚴重にした。かくして謂はゆる宗家制度が確立したのである。

即ち、一般の能役者は夫々自らの所屬する流派の家元の監督を受け、家元は幕府の監督を受け、かくして能樂界の秩序が保たれて居たのである。従つて一般の能役者は勿論、大夫と雖も、妄りに私意を以つて古來の式法を紊ることを許されなかつた。その爲に能樂は藝術としての純粹性を失ふことなく今日に至り得たのである。若し、江戸時代に幕府の厳格な監督がなかつたならば、また其れに依つて謂はゆる宗家制度が確立されなかつたならば、能樂は今日見る如き洗練された藝術となり得なかつたのは勿論、時の流れに押されて不純な夾雜物の混入を免れ得なかつたであらう。端的に言へば、他の舞臺藝術との混血が生じたかも知れないのである。その事のなかつたのは全く江戸幕府の賢

明な處置の賜物であると言はねばならない。

その江戸幕府にも遂に最後の日は来た。今まで幕府の庇護の下に宛ら温室に咲き亂れた花の如き艶姿を誇つて居た能樂は、明治維新の大政變と共に、突如として吹きすさぶ嵐の眞只中に投げ出されたのである。明治維新後の數年間こそは、能樂に取つては未だ會てない苦難の時期であり、また試煉の時期であつたのである。

あとがき

いよいよ小林君のこの著が、校了になつと聞いて、私は安堵の胸を撫でおろした。

かねて覺悟の如く、聖戰の第一線に立つ事となりました。「能樂史」は小生の絶筆となるでせう。何とぞ世に出るやうにお計らひ下さいまし。今生のお願ひは、たゞこの事でございます。そして是非先生に序文を書いて頂きたいと思ひます。萬一出版不能の場合——そして小生戰死の報が届きましたら、原稿は遺族へお返し下さい。遺骨・遺髪の代りにこれを埋葬致します。それでは失禮致します。長い間可愛がつて頂きましてありがたう存じました。先生にも御健勝でお過し下さいませ。

右のやうに認められた紙片が、前後の事情を言ひ添へて、奥さんの君枝さんから郵送されたのは六月下旬であつた。これには打たれた。その昔源平の戦ひの時、薩摩守忠度が「さゞ波や志賀の都はあれにしを」の一首を俊成卿に託したと同じ心境で、小林君が此の書をまとめたことは、巻頭の自序の中にも明らかにされてゐる。この上は、どうか無事に彼れを戰場まで送ると共に、この書も一日も早く世に出るやうにしたいと念願しつづけたのであつた。

小林君の能樂における實際的造詣と、堅實犀利な研究とは、既に定評がある。早大の國文科卒業後間もなく公刊した『能樂史料』二巻をはじめ、『謡曲評釋』『謡曲作者の研究』『世阿彌』その他の論考が、十分に明證してゐるから

贅言しない。

帝都も完全に戦場化した今日、齋藤雄山閣主その他の方々、校正のことにあたつてくれた小林君の親友築瀬一雄君等の、なみなみならぬ御丹精で、製本出来の日を待つばかりになつたことは、藝能學界のため、また自分一個にとつても心から嬉しく、感謝の上もないのである。

今や世界の注目をあつめつつある決戦場比島に、彼れ小林君も早く到着したことは、情報として承知してゐるが、出版許可の報さへも届きかねてゐるであらう。覺悟の如く戦死したら靈前に供へられることになつたのをよろこぶ。だが、學界のため能樂界のために、友人の一人として若き君の武運長久を、切に祈りつつ擱筆する。

昭和二十年一月二十日

河竹繁俊

著者略歴 小林 靜雄 昭和五年早稻田大學國文學專攻科卒

昭和二十年二月廿五日印刷
昭和二十年三月一日發行

能樂史研究

一〇〇〇部

定價 金五圓九十錢

査定番號一ノ三七〇號

著者 小林 靜雄

東京都麴町區富士見町二ノ八

發行者 齋藤 幸藏

東京都本郷區駒込富士前町二八

印刷者 桐谷 綱

東京都麴町區富士見町二ノ八

發行所 株式會社 雄山閣

會員番號一三〇〇九二

東京都神田區淡路町二ノ九

配給元 日本出版配給株式會社

印刷所 雙葉社印刷所(東京一四三)

製本所 折井製本所

出版會承認
二〇〇九三號



773

kol2

終